

防衛大学校本科第26期学生及び理工学研究科第17期学生
入校式における学校長式辞（昭和53年4月5日）

本日、防衛大学校本科第26期学生と理工学研究科第17期学生の入校式を挙行いたしますに当り、竹中防衛政務次官^{注(1)}、鈴木陸上幕僚副長^{注(2)}、榎原海上幕僚副長^{注(3)}、伊中航空幕僚副長^{注(4)}、常廣統合幕僚会議事務局長^{注(5)}、地元横須賀市からは横山市長^{注(6)}、小佐野商工会議所会頭^{注(7)}等、多数の来賓並びに父兄各位の御臨席を得ました。これは新入生にとりましてはもとより、防衛大学校にとりまして光栄の至りと存じます。職員並びに学生一同に代り心から御礼を申し上げる次第であります。



第3代学校長 猪木 正道

まず理工学研究科に入校された諸君は、すでに自衛隊の各種部隊や防衛庁の諸機関において経験を積んでおられ、今回特に選ばれて、本校研究科で高度の科学技術の研究に専念することになりました。我が国の防衛に関する科学技術は、遺憾ながらまだまだ立ち遅れた点や未開拓の分野を数多く残しています。国家の防衛力が科学技術力にどれほど強く依存しているかは、日本及び世界の歴史が雄弁に物語っています。第二次世界大戦中に、我が陸海軍がレーダーや近接信管の立ち遅れにどれほどの苦杯を喫するか、またポーランド軍やフランス軍が、ドイツ軍の電撃戦によっていかに惨めな敗北を帰したかを忘れてはなりません。ヴェトナム戦争の末期に出現したいわゆる精密誘導兵器が、今後の戦争にいかなる影響を及ぼすかは何人も断言できないでしょう。世界各国が国防を目的とする科学技術の開発にかけている熱意は、大変なものであります。陸・海・空各自衛隊の装備を近代化する上で、諸君の新鮮で柔軟な頭脳に対する期待は絶大なもの

注(1) 竹中修一
注(2) 鈴木敏通
注(3) 榎原秀夫
注(4) 伊中四郎
注(5) 常廣栄一(海)
注(6) 横山和夫
注(7) 小佐野皆吉

であります。理工学研究科在学中における諸君の奮起と精進とを期待します。

次に本科に入校された諸君が我が防衛大学校への進学を決断されたことに対し、心から敬意を表したいのであります。防衛大学校の全職員・全学生は、諸君を国家防衛の同志として双手を挙げて歓迎します。防衛大学校の教育目的は、防衛庁設置法第33条に明示されております。それは「幹部自衛官となるべきものを教育訓練する」ことでもあります。この目的を達するため防衛大学校規則第5条は、「広い視野を開き、科学的な思考力を養い、豊かな人間性を培う」という三点を強調した上で、本校の五つの教育方針を明らかにしています。

その第一は性格の形成でありまして、「本校の教育訓練、学生舎生活及び校友会活動を通じて、自主自律、積極敢為の気風を養い、幹部自衛官としてその職責を尽しうる性格を育成する」ことでもあります。

第二に本校の教育課程は大学設置基準に準拠しており、一般教育、理工学または人文社会科学及び防衛に関する学理及び応用を授けます。

第三に本校の訓練課程は、自衛隊の必要とする基礎的な訓練事項について錬成します。

第四に学生全員の参加する体育活動と各種の運動競技を奨励して、訓練とともに強健な体力と旺盛な気力を育成します。体力と気力なくしては知力がいかに優れていまして、肝心の時に任務を遂行できません。諸君が直ちに校友会の運動部に加入して、心身を鍛えることを期待します。

第五番目は、あらゆる機会に、陸・海・空各自衛隊の幹部自衛官となるべきものの間に理解協力の気風を育成することでもあります。

右の教育方針には、今から26年前、日本国が独立を回復した際、防衛大学校の創立に当られた諸先輩の苦心がにじみ出ています。広い視野、科学的な思考力、豊かな人間性を強調し、陸・海・空の理解協力を特筆していること等、日本及び世界の歴史の教訓から学んだすばらしい教育方針といわなければなりません。

近年、ややもすれば教えるものは自信を喪失して教育する義務を怠り、学ぶものは学生の本分を忘れ、教育を受ける義務を^{ほうてき}放擲している学校も少なくありません。我が防衛大学校では、右の立派な教育方針の下に、教育するものと教育されるものとが全力を挙げて、与えられた使命を全うしたいと念願する次第です。諸君が教室に、実験室に、図書館に、体育館に、運動競技場に、演習場に、そして学生舎において、受動的に教えられるのみならず、自から積極的に学ぶことを期待して、式辞を終わります。